



Title	＜紹介＞前田富祺著『国語語彙史研究』
Author(s)	森山, 卓郎
Citation	語文. 1986, 47, p. 67-68
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68747
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【紹介】 前田富祺著『国語語彙史研究』

森山 卓郎

本書は、前田助教教授のこれまでの御論文百編あまりの中から、国語語彙論史、国語語彙史研究、国語語彙史論に属するものを選んで新たに整理されたものである。語彙史の研究という研究対象の性格もあろうが、これまでの御研究の集大成と言える、全九二七ページの、まさに大著と言うにふさわしい内容であり、量である。

国語語彙史研究に於ける体系的研究とはいかなるものか、いかにあるべきか、ということを経年にわたって研究されてきた著者の成果であり、語彙史研究の一時代を画す、学界待望の書であると言える。

以下、簡単に内容の紹介をしたいと思うが、何しろ目次だけでも一四ページにのぼるので、この限られた紙幅では到底その任を全うできないというのを予め断っておかなければならない。いかに名著といえども実際に読まなければ話にならないのである。もし、この拙い紹介を機縁として、一人でも多くの方がこの書に邂逅され、そして、親しまれることがあれば望外の慶びである。

本書の構成は次のようになっている。

「第一部 国語語彙論史」は、国語学史に位置づけられる、語彙論の研究史を考察したものである。次のような二部からなっている。「I 国語語彙史論の研究」は、古代から近世、近代にわたる国語語彙意識、研究史、を様々な観点から整理・考察したものである。

「II 現代における国語研究の展望」は、著者の学会展望、書評な

どからなり、それぞれの時点での著者のお考えが窺われるものである。

「第二部 国語語彙史研究」は、著者自身も述べられるとおり、本書の中心である。

「I、語史研究から語彙研究へ」という部では、「語史とは」「語史研究のフローチャート」「語形変化について」「語義変化について」「語彙研究資料としての節用集」ということを中心とした章だてになっいて、個別の「語史」から「語誌」へ、さらに体系的な在り方としての「語彙史」へという枠組の中で、実際の研究方法が研究議論されている。特に「フローチャート」は、語史研究を科学的ならしめようとする重要なまとめであり、学生、院生など、この流れ図によって論文やレポートをまとめる姿があちこちの図書館で見られる。「語形変化について」の章では、豊富な用例によって語形変化の様相が明らかにされている。「語義変化について」の章では、著者の言語習得の研究もふまえて、複雑な「意味」の問題へのアプローチがなされている。さらに、「語史研究資料としての節用集」の章では、幾つかの語が『節用集』諸本間について実際に調査され、資料として『節用集』をいかに使うべきか、という検討が加えられていて、有益である。

「II 語史研究・語彙史研究の試み」では、実際の例として、「ハグム」と「ハゴクム」「ヒネモスの語形変化」「蝙蝠の語史」「モグラの語史」「童の語史」「かたづくの語史」「いろこ」と、いろいろ「めくばせ」の語誌」「軍記物語における武装描写の語彙」——衣生活語彙史序説として——「中世における象徴詞、くるり、系、くるり、系」の語彙をめぐって——象徴語彙史研究の試み——」

などが研究されていて、個別的ではあるが、それぞれに、非常に興味深いものであり、研究の事例として方法論的に参照すべきことが多い。

「Ⅲ 身体語彙史の研究」では、記述の方法などが検討された後に、実際に「指の呼び方について」「手の甲の呼び方について」「掌の呼び方について」「手首から肩までの呼び方について」「足の甲と足の裏の呼び方について」「言語地理学的な研究との関わり——踵呼び方を例として——」「語彙体系の記述の試み——手から肩までの呼び方を例として——」ということが具体的に研究されている。身体語彙は、「もの（指示物）」自体が明らかかなもので、体系という観点で扱いやすいものである。ここでの研究は、言語地理学を利用したものなど、色々な新しい観点からの、体系的な研究として特に注目すべきものであらう。

「第三部 国語語彙論」は、語彙史研究の理論的なまとめである。「語とは」という章では、「語」とは何かという問題に対する色々な考え方が検討してある。「語彙の体系とは」という章では、ある特定の条件にかなった語の集まりを語彙とするVという著者の立場から、体系的な語彙史研究の在り方に対する検討が加えられている。「語彙史とは」では、「存在として語彙史と事実としての語彙史」といった歴史的研究の諸特徴（方言差など）についての考え方の検討が加えられている。「語義変化とは」の章では、語義変化として、Ⅰ：語義は変わらないが指示物が変わるもの（指示物自体の変化、指示物に対する人間の認識や主観的態度の変化など）、Ⅱ：言語自体の意味変化（連想による転用や、意味の近接）、Ⅲ：形態との関わりでの語義変化、が挙げられて、それぞれに考察されている。

る。「語彙史研究の問点——数詞語彙史を例として——」は、最も体系的な語彙と言える数詞について考察されたものである。「語彙史の時代区分」では、本書でとりあげられた語を使って、時代区分がなされている。

末尾には、膨大な索引が付けられているので、机辺にあれば有益であらうことも付け加えておかなければならない。

（昭和六〇年十月 明治書院 一八〇〇〇円）